ヒマラヤ学誌　*No.19, 160-166, 2018*

現地調査は何のため？
―ドムカル村ガイドブックの出版―

山口哲由

農業・食品産業技術総合研究機構

1. ドムカル村における生業班の立ち位置

「ところであなたたちは何をやってるの？」：2011 年の夏の調査時に、当時のドムカル村の村長をしていたツェリン・プンツォグ氏から投げかけられた言葉である。

総合地球環境学研究所のプロジェクト『人の生老病死と高所環境―「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応」（プロジェクトリーダー：奥宮清人）、いわゆる高所プロジェクトは、2008 年から 5 年間に渡っておこなわれた[1)]。このプロジェクトでは、医学研究者を中心とする医学班と地理学や農学に基盤を置く生業班が共同で調査をおこない、高所環境における現代的な課題を明らかにすることを目的としていた。チベット文化圏を中心としていくつかの調査地が設定されたが、そのうちの 1 つがインド北部に位置するラダークのドムカル村であった（図 1）。2008 年に初めて高所プロジェクトの研究者がドムカル村を訪問し、2009 年の夏には、医学班と現地 NGO である Heart Foundation が協力してドムカル村でおよそ 2 週間におよぶ健康診断をおこなった（写真 1）。ラダークはインドのなかでも辺境に位置付けられるが、ラダークの中心地レーには病院もいくつかあり、ドムカル村が隣接するカルツィ村には診療所が設けられている。それでも日本から来た医師が健康診断をやってくれるという話は現地で大きな評判になり、ドムカル周辺の村落からも含めてのべ 300 人ほどが参加して検診を受けた。

ドムカル村の人びとによる、日本の医学に対する信頼感と期待感は圧倒的であったが、傍から見ていた医学班は、その働き方も圧倒的であった。医学班の大部分は朝 5 時には起床しており、朝食も適当に検診希望の村内の検診希望者を車で迎えに行っていた。検診は朝 7 時過ぎには始まり、夕方 6 時過ぎまで続いた。検診後も夕食を挟んで医学班の面々はその日の検診者のデータ入力作業に

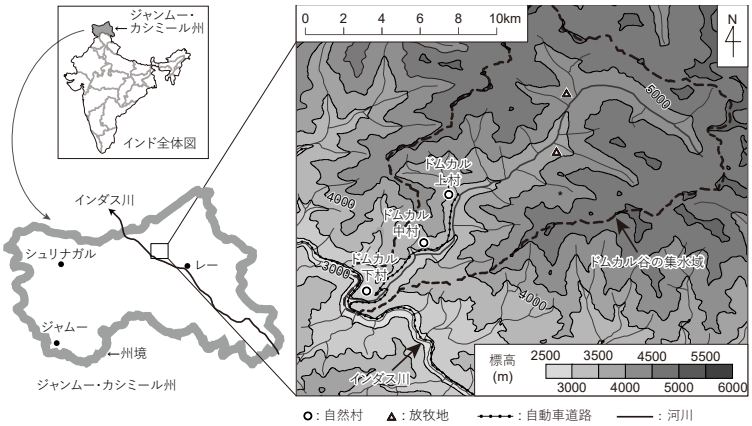

図 1　ドムカル村の地図。ドムカル村は、インダス川支流のドムカル川に沿って分布している。村落は高さに応じて 3 つの集落に分かれており、集落上流には夏用の放牧地がある。

取り掛かり、日付が変わるまで入力作業をおこなっていた。

健康診断は村の一画にテントを設営しておこなわれた。私は一つのテントに間借りしながら、医学班とは別にドムカル住民の世帯リストを作成していた。私の調査では、朝8時過ぎくらいから現地の環境NGO（Ladakh Ecological Developement Group: LEDeG）の職員であるソナム・ゴデゥップ氏と農家訪問に出かけ、各世帯で1時間くらい掛けて家族の話や村での生活を聞いていた。ラダークの夏は、チャン（オオムギから作ったどぶろく）やアラック（どぶろくを蒸留した焼酎）造りの最盛期であり、農家調査の際には世帯ごとにこれらを勧められることとなり、5-6件の調査が終わって夕方にテントに戻る頃には、私とソナム氏は顔を真っ赤にしてフラフラになっていた。

医学班は2週間に渡って精力的に働いた後、嵐のように去っていった。医学班は、2011年以降はラダークを訪れることは少なくなった。一方で生業班は毎年誰かがドムカル村を訪れるようにして、ドムカル村での調査を現在まで継続してきた。生業班の主題は農耕や牧畜といった生業の変化に関してであり、土地の利用所有状況や村落を中心とした経済活動の変遷、人びとの居住状況などに関する調査をおこない、政治・経済状況の変化によって活力を失うドムカル村の農牧業の現状を報告してきた[2)]。そんななかで投げかけられたのが冒頭の言葉である。

村長曰く「日本のお医者さんたちは色々と調べてくれて、体の悪いところを言ってくれた。非常にありがたかった。あなたたちは、農業のことや土地の歴史を根堀り葉掘り聞いているが、一体それが何になるのか？」ということであった。村長は詰問している訳ではなく、「あなたたち（生業班）のやっていることは我々（ドムカル村住民）にとってどういう意義があるのか？」ということを心底いぶかしがる様子であった。私は「我々はラダックの地方政府と協同で仕事をしており、農業の現状や生活変化の問題点を地方政府に報告することで、それらの問題が解決されるような政策も期待できる」と説明したが、言っている本人も信じていない言い訳で納得させられる訳もなく、村長はしばらく怪訝そうな顔をしていた。

こういった疑問は村長だけのものではなく、以降も異口同音に尋ねられた。もちろん、医学班の調査姿勢に関しても支持する人ばかりではなく、「湿布やビタミン剤をあげれば良いと思ってるんでしょ？」や「血液検査の詳しい結果は我々には教えてくれないの？」という言葉も聞かされたが、それでも傍から見るに医学班の現地貢献の姿勢は明確であり、それと比較して生業班の立ち位置は不明瞭であり、農業や土地利用に関する調査がドムカル村の人びとに対してどのような意義を提示できるのかという課題は私のなかに残り続けた。

2. どのように地域を理解していけば良いのか？

「今の方が良いよ、（交通の便が良くなって）レーに嫁いだ娘の所にも簡単に行けるようになったし、ダライ・ラマの法話を聞きに行くこともできたし」: 2014年夏の調査時に「今と昔の生活はどっちが良い？」と尋ねた際のベサナ家の女性の答え

ドムカルも含めたラダークの村々では、農耕と牧畜を主体としながら交易活動も交えた生業が営まれてきた。1970年代からラダーク社会を見続けてきたヘレナ＝ノーバーグホッジは、ラダークの自然に根ざした生活やそれを担う人びとの素朴さを描くとともに、それらが変化しつつある状況を嘆いて1990年代に「懐かしい未来」を執筆した[3)]。ノーバーグホッジ氏はNGO活動家であり、ラダーク社会の素朴な生活をこの著作のなかで描くことによって先進国の現代社会の課題を浮き彫りにし、大きな反響を得た。

我々の調査でも、かつてのドムカル村では、標高が低い土地と高い土地の自然環境の違いを上手く利用した農牧業が営まれてきた様子を明らかにするとともに、近年はインド政府によって安価な食料の配給がおこなわれ、若者が就職や学業のために村を離れて過疎化する状況下で、かつての自然環境に立脚した農牧業が大きく変わっている様子を論文として報告してきた[4)]。近年のドムカル村の状況は『懐かしい未来』で描かれた村落の変化そのものであり、ノーバーグホッジ氏の嘆きも理解できた。一方で我々は、昔は春先の食べものを得るのに非常に苦労した話や（写真2）、病気

でも治療を受けられずに亡くなる子どもが多かったという話をするドムカル村の人びととも出会っており（表1）、ドムカル村の変化は、食料や健康、教育などに関する悩みを克服するうえで受け入れてきた変化であるとも理解できた。本節の冒頭で示したベサナ家の女性の言葉も、モータリゼーション進展という大きな社会変化に応じて現在の生活に意義を見出している積極的な姿勢を示している。

ノーバーグホッジ氏は、物質的な豊かさのみを追求する先進国の現代社会への対照としてラダーク社会を描いたわけであり、当時のラダーク社会が持っていた課題も含めた全景を描写した訳ではない。また、彼女が目の当たりにした1970年代のラダーク社会も、イギリス統治やインド独立、印パ戦争といった大きな社会変化を経て久しい姿であり、伝統的なものとは異なる。にも関わらず、現在でも『懐かしい未来』に描かれた素朴な村落像を期待してラダークを訪れる旅行者や短期滞在の研究者は多い。そのため、ラダークの若者や知識層のなかには、『懐かしい未来』で描かれた仮想の伝統社会が理想化され、それが世界で広く流通していることに対して反感を抱くものも少なくない。

このようにラダークでは、外部者が抱く地域像と実際にそこで生活している人びとの地域像には乖離があり、そういった乖離を埋めることも地域に関わる研究者の役割ではないかと、ドムカル村での調査が進むにつれて考えるようになっていた。もちろん、生業班がドムカル村での調査を続けてきたとはいえ、その期間はノーバーグホッジ氏がラダークと関わり続けた期間よりもはるかに短く、また、我々が見たドムカル村の姿が現在のラダークを代表するものでもない。それでも、多様な視点からの地域像を提示することによって、上述のような地域像の乖離を埋める役割を担うことができるのではないかと考えた。

表1　ドムカル上村の女性の出産に関する状況

出産の年代	n	死産もしくは5歳以下での死亡（%）	Lehの病院での出産（%）
1950-1969	75	20	0
1970-1979	91	25	0
1980-1989	153	17	7
1990-1999	130	12	27
2000-2006	43	12	67

2010年にドムカル上村の住民台帳に登録されていた女性117人に対して，出産状況に関する聞き取り調査をおこなった結果に基づく。

3. ドムカル村の発展に直接貢献する試みとしての観光ガイドブック

ラダーク経済を支えてきた伝統的な農耕や牧畜、交易活動は、上述したように活力を失っている。現在のラダーク経済を考えるうえで欠かせない一つの要素が軍の存在である。国境紛争の要地としてラダークには大規模な軍隊が駐屯しており、ドムカルの男性が村外で働く場合、最も多いのが軍隊勤務である。軍隊での物資輸送に従事するものやコックとして働くものもみられる。しかし、軍や軍関連のサービス業で働くものの大半はレー周辺に居住しており、ドムカル村の経済への直接的な影響はあまり大きくない。

ラダーク経済を支えるもう一つの柱が観光業である。長い間、外国人に対して閉ざされてきた中国国内のチベット地域に対して、ラダークは1974年から外国人に開放され、以降、多くの外国人観光客を集めてきた。近年はインド経済の発展に伴ってラダークを訪れる国内旅行者も増えており、2009年以降は国内旅行者数が外国人旅行者数を上回っている。観光業の恩恵を受けることができるのは、観光客が滞在するレー周辺か、もしくは著名な僧院やトレッキングルートに近い村落に限られており、ドムカルのような普通の村落はあまり恩恵を受けない。

それでも停滞する農牧業をおぎなう収入源として観光業に期待をかけている人びとも多く、ドムカル村でゲストハウスを開く世帯も出てきている（写真3）。ドムカル村の村長からも、観光業の盛り上げていく方法などを尋ねられたことがあったが、当時は、ドムカル村が人を引き付けるどのような魅力を持っているのかに思い至らなかった。しかし、調査が進んでドムカル村の人びとの生活が分かるようになり、上述のような地域像の乖離の問題を考えるようになってからは、観光名所などがない普通の村だからこそ、大きな社会変化のなかで人びとが生き方を模索している様子を感じ

写真１　ドムカル村の高齢者に診察結果を説明する Heart Fondation の Tsering Norboo 医　師。Norboo 医師はラダーク全域を対象として村落での健康診断を続けている。

写真２　灯油の配給日に給油缶を持って集まる様子。灯油の他にも、コムギやコメなどが市場よりも低価格で配給されている。ラダークの人びとの生活は、これら政府からの配給なしでは成り立たなくなっている。

写真３　ドムカル村で 2014 年から営業しているガトパ・ゲストハウス。ドムカル村にはもう一軒シャリルンパゲストハウスもあるが、宿泊利用者はまだ多くない。

写真４　ドムカル谷上流部には、表面にいくつもの目玉状の模様を持つ黒色の奇岩が祀られており、ゴンパ・ランジョン（自然が形作った僧院）と呼ばれている。

写真５　ドミザル（人喰い岩）と呼ばれる巨大な一枚岩。1949 年の印パ戦争の際、ドムカル村も一時パキスタン軍の占領下に置かれたが、女子供はドミザルの後ろに隠れて難を逃れた。

取ることができ、そんなラダークの“今”を知ってもらう地域ツーリズム[5]の場としてドムカルに人を呼び込むことができるのではないかと考えるようになった。

その前提としてドムカル村の観光ガイドブックを製作しようと思いついたのが、高所プロジェクトが終わりを迎えた2013年頃である。生業班は、これまでの調査を通してドムカル村の地図を作成し、地形や文化的景観などに関する知見を有しており、さらには個々の研究者の専門に応じて農産物やその加工方法、食事、生活スタイル、近年の教育や経済的な状況に関する調査もおこなってきた。これらの資料を用いて論文を書いてきた訳であるが、学術論文では村落の事象をそのまま記述するだけでは許されず、調査村の状況がどのような文脈で意味を持つのかを常に問われる。そのため、当該村落で調査をして明らかになった事象のなかでも先行研究に沿って必要な部分のみが記述され、論旨とは直接関係ないドムカルという村が有する地理的な特性や歴史的な背景、そこに居住する人びとの個性などの大部分は捨象されてきた。このガイドブックでは、学術論文では切り捨てられてきた部分も活かすことによって、これまでに培われてきた生活のなかに新たな変化も取り入れてたくましく生きようとしている人びとの様子を具体的に伝えることを目指した。

このガイドブックを出版するため、トヨタ財団の共同研究助成に申請し、「インド北部ラダークの村落における「物産誌」の製作―山地村落からの顔の見える地域像の発信」（課題番号：D13-R-0055）という課題として採用された。この助成金を利用して補足的な調査をおこなうとともに、生業班の現地カウンターパートであったLEDeGの協力を得て編集や修正作業を進め、2015年に『The Village of Domkhar: Ecological Livelihoods and their Changes』（図2）を出版した[6]。

この本は6章立てであり、第1章“Welcome to Ladakh“ではラダークへの訪問方法から説明し、第2章“Introduction to Domkhar”でドムカル村の位置や気候などを示して概要を説明した。第3章“Cultural landscape”ではドムカル村のなかで自然石を祀っているゴンパ・ランジョン（写真4、自然が形作った僧院という意味）や高さ数百メートルのドミザル（写真5、人喰い岩という意味）と呼ばれる巨岩などの見所を紹介し、第4章の“Food”、第5章“Crops, livestock, and land”では、村落の自然環境のなかで人びとがどのように食べ物を得てきたのかを解説した。これらを踏まえたうえで第6章“Past and present”でドムカル村の近年の変化を具体的なデータを交えて示した。多くの写真を用いて分かり易い説明を心がけ（図3）、

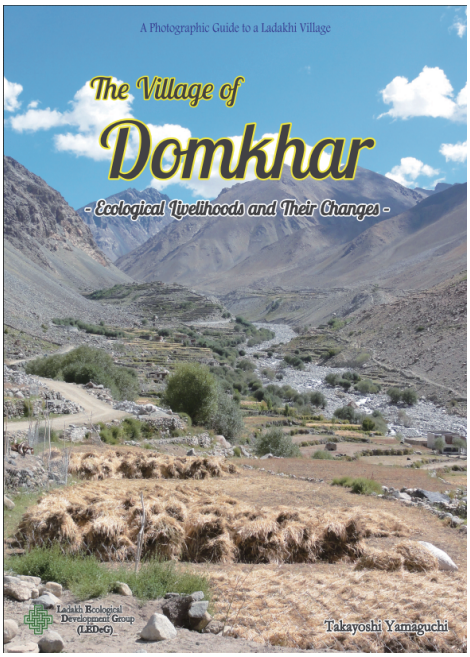

図2　ドムカル村ガイドブックの表紙。ドムカル村は、ドムカル川に沿って分布する10kmほど細長い集落である。集落の高低差は1000m以上に及び、標高の変化に応じた風景や生業の変化を感じることができる。

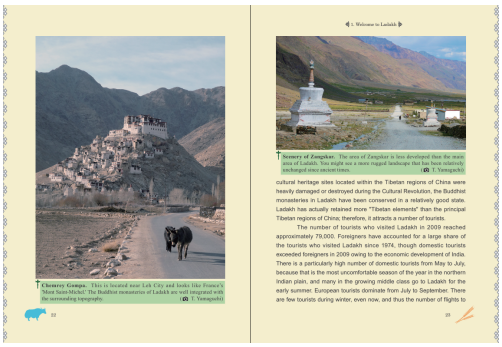

図3　ドムカル村ガイドブックの内容。写真を多用して、ラダークやドムカル村の風景がイメージし易いように工夫している。

読者の興味をかき立てることによって、実際にドムカル村を訪問して“ラダークの今”を体験してくれるように願いを込めたつもりである。現在、デリーやダラムサラ、ラダークのチベット関連書籍を扱う書店でこのガイドブックは販売されているが、これがドムカル村にどのような影響をもたらすのかは、今後も継続的にドムカル村と関わり続けることで確認していきたいと思う。

仏教には「諸行無常」という言葉がある。この世の全てのものは時とともに移ろいゆくのが理（ことわり）であり、変わらないと思って執着するから哀しみが生まれるのだという。ラダークは、インドや中国といった大文明の間で繁栄してきた地域であり、周辺の情勢変化に応じてその立ち位置を変えながら存続してきたことはいくつかの歴史書が示す通りである。ラダークで暮らす人びとも、その情勢変化のなかでの立ち位置に応じて生業を変えながら生きてきたとされる[7)]。変わらないものはないということを踏まえたうえで、ラダークの人びとが大きな社会変化のなかでどのように生きようとしているのかを垣間見ることによって、自らの生活も含めてどのように変わっていくべきかを考える方が、不変の理想像を地域に投影して変化を嘆くよりもはるかに有意義ではないだろうか。

（ドムカル村ガイドブックにご興味のある方は著者までご連絡ください、残部をお譲りします。）

1） 奥宮清人編．2011.『生老病死のエコロジー―チベット・ヒマラヤに生きる』．昭和堂.

2） Yamaguchi, T, Sonam Ngodup, Nose, M., Takeda, S. 2016. Community-scale analysis of the farmland abandonment occurrence process in the mountain region of Ladakh, India. *Land Use Science* 11(4): 401-416.

3） Norberg-Hodge, H. 1991.“Ancient Futures: Learning from Ladakh”. Sierra Club Books.

4） 山口哲由．2009.「ラダーク地域における村落の変容―山地における人と環境の結びつきに関する考察―」『ヒマラヤ学誌』11: 78-89 頁.

5） 佐々木一成．2008.『観光振興と魅力あるまちづくり―地域ツーリズムの展望』．学芸出版社.

6） Yamaguchi, T (ed.). 2015.“The Village of Domkhar -Ecological Livelihoods and Their Changes-”. Ladakh Ecological Development Group (LEDeG).

7） Rizvi, J. 1999.“Trans-Himalayan Caravans: Merchant Princes and Peasant Traders in Ladakh”. Oxford University Press.

Summary

What is the Meaning of Fieldwork? Publication of “The Village of Domkhar: Ecological Livelihoods and their Changes”

Takayoshi Yamaguchi

National Agriculture and Food Research Organization

The research project “Human Life, Aging, and Disease in High-Altitude Environments: Physio-Medical, Ecological, and Cultural Adaptation in ‘Highland Civilizations’” founded by the Research Institute for Humanity and Nature was initiated in 2008. Domkhar village, located at Ladakh, was a major research site of the project. We have conducted field work in Domkhar during the project, and published “The Village of Domkhar: Ecological Livelihoods and their Changes” in 2015. This book was published as a guidebook for tourists, and so we presented the complete picture of the Domkhar village without using any academic terms. This essay explains the reason we published the guide book of Domkhar.